せたかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇四号（一日発行）
平成十年五月一日

年表で読む 古平の歴史 《11》

■古平場所を請け負った恵比須屋・岡田弥三右衛門

岡田家の初代となる弥三右衛門は商売で身を立てようとして、織田信長が城を築いた安土に店を出しましたが、織田家が衰えると安土もすっかりさびれてしまい、やがて近江八幡に移りました。しかし、そこも城がなくなると町は次第にさびれていってしまいました。

そこで弥三右衛門は、ついに行商をすることを決意して南部地方まで来ましたが、八戸を根拠にして呉服反物類の販売を始めたのです。

そのうち、雑貨などを船に積んで松前城下で販売をしたところ大変利益があったことから、八戸を去って福山（松前）に商売の場所を移すことにしたのです。

しかし、当時の松前はまだいなか町で商売をする適当な場所がなかったので、知り合いの藩士工藤平右衛門の家に身を寄せて開業し、間もなく町内に店を出しました。そして、郷里から物資を運んで来ては販売し、次第に商売を広げていきました。屋号を恵比須屋といい、持ち船の北前船の帆には‖（いちぜんばし）の船印をつけて、日本海を往来していたことは先にも書いたとおりです。

■十三代続いた岡田家

最盛期には各地で二十三場所も請け負っていた岡田家は、松前藩に莫大なご用金を用立てるほどの財力があり、松前では第一位の豪商でした。同じ場所請負人でも主に道東方面で財力を蓄えた村山伝兵衛は、当時、全国の長者番付で一、二位を争うほどでしたが、わずか一代ですべての財産を失ってしまいました。しかし、岡田家は代々繁栄して十三代も続き、古平場所を譲ってから後も小樽で商売を続け、明治三十四年に本店のある近江八幡へ引き上げました。

■開拓使と古平郡

やがて時代は明治となり、国内の戦乱もようやく治まってそれまでの蝦夷地に開拓使が置かれ、名前も『北海道』と改称されました。

明治二年八月十五日（一八六九）太政官布告によって北海道は十一州に分けられ、八十一郡が決まり、これによって古平郡が誕生したことから、古平町ではこの年を『開町記念の年』としているのです。

昭和四十三年、古平町開町百年記念が華やかに行われましたが、同じ年に開道百年記念も行われたことを記憶されていることと思います。

後志はその中の一州として、次の十七郡がありました。

久遠・奥尻・太櫓・瀬棚・嶋牧・寿都・歌棄・磯屋・島内・古宇・積丹・美囮・古平・余市・忍路・高島・小樽

その後、明治五年になり次の九郡となりました。

岩内・古宇・積丹・美国・古平・余市・忍路・高島・小樽

■古平御用所から古平御役所に

新政府がようやくできたばかりで、国の制度もまだ十分に整っていませんでしたから、北海道の行政の仕組みもあわただしく変わりました。

高野名幸作さんの日記から

江戸の世相を見る

【4】

大正一一年

1／5　寒い寒い朝、ふとんの中に入っていても足が暖まらない。店のこたつに入って耳かけをしている。田君らが来て、ウサギ撃ちに行くので鉄砲を貸してくれという。夕方帰ってきたがカラ戻りであった。

1／6　寒さが厳しい中各宗の寒修業が出はじめる。店番をしながら習字をする。

1／9　夜、本で蓄音機をかけるから来いというので聞きに行く。浪花節を聞く。

1／12　入舟町の×松の川崎船が遭難、八人のうち四人が死んだとか。（×＝二字脱）

1／13　正隆寺で何会とかの発会式があるというので母が行く。大吹雪になり、寒さも厳しく、こたつに入ったが皆手も出さない。

1／15　青年演芸会があり見物に行く。かなりの人出である。

1／16　近ごろ白米の値段が上り、ついに一俵十円四十銭になる。この相場では一般が困るだろう。

1／17　道民大会が札幌である。東京でも大会があるとのこと。国民の世論もやかましい。内閣不信任案が提出されるだろう、政府はいかなる処置をとるのか。

1／21　夜、学校で通俗講演会があり、その後、蓄音機で浪花節を聞く。十一時帰宅

1／23　今年はカレー大漁、カレー網がよく売れる。夜、〈八から自動車の機械仕掛けの玩具を貰う。

1／24　太陽が輝き春先のような景色、天気が良いので浜に出てみる。小樽通いの古余丸が前浜を走っている。

2／1　学校で学芸会があるというので見に行く。生徒の作品が展示している。手工というのがあったが、自分たちの小学校時代にはなかった。

2／6　今日は旧暦の元旦なので、もちの馳走があった。

2／11　朝のうちから大吹雪、紀元節だがこれでは国旗も立てられない

2／15　カレ網は近年稀な大漁で業者は大喜び。われわれ漁具商もよい。現在、白米一俵十円十銭と少し下がった。

2／18　活動写真を見に行ったが大入りであった。写真は鮮明でなかったが弁士が良く木戸銭五銭は安かった。

2／20　この夜、近年にない地震があって驚いた。

3／1　小樽田主人が沖村で用事をたし、その後、湯内までの山道で行方不明とのこと。捜索に沖村青年会から三十余名、湯内からも四十余名が出ているという。

3／12　この日、支庁から郡農会技師が来て、りんごの枝切り実技指導があった。父らは本畑に行く。

3／16　昨夜、美国沖合いに出漁していた鳳丸が、流し網で鰊約七千尾獲る。その後、川崎船などが出て、計二万五千尾も獲る。

3／19　浜では、歩方の連中が雪投げや薪運びなどをやっている。半歳も雪に埋もれているので、これで春らしくなった。

3／20　浜ではヤン衆連が鰊場の準備に忙しい。夜、学校で純神道講話があるというので聞きに行ったが、さっぱりなので途中で帰る。

3／21　彼岸の中日で、父が寺参りに行く。雨が降り出して雪が消えることおびただしいが、家の前に水がたまって池のようだ

4／1　この朝、初鰊が獲れる。〈八から十五尾、〇一から五尾、⑪から三尾貰う

4／2　浜に行くと建網がすべて揃って賑やかになった。夜、父は忠さんのところの網下ろしに招待されて行く

―― 続く ――

山が怒り 川が襲った ①

恐怖の鉄砲水 ⑧

富山市 高橋藤蔵
（元 稲倉石鉱業所勤務）

もう三十年も前の事ですから町民の皆さんで知っている方はごく少ないと思いますが、稲倉石が鉄砲水に襲われた事があったのです。

それは昭和四十二年二月二十三日の未明の事です。

山奥にある稲倉石の二月といえば、積雪二〜三メートル、軒先あたりが道路で、玄関には下り階段を付け、まるで地下室にでも入るような、そんな厳しい真冬の真只中のはずなのに、この年は連日春先のような好天が続き、山の雪も岩肌が見える程に融け、特に二十二日は季節外れの集中豪雨となり、中央を流れる稲倉石川が異常に増水したのです。

翌二十三日午前四時。

鉱山の守衛さんが住宅地区を巡回中に稲倉石川が溢れんばかりに増水したのを目撃し、住宅街のサイレンを吹鳴して「緊急事態発生」を知らせた。

直ちに、鉱山の自治消防団が召集され

・川沿いと低地の住民は、老人と子どもを避難させ、最小限の家財のみ搬出する事。

・危険地域外の住民は、これに協力する事。

・稲倉石川の増水を監視し、警戒に当たる事。

を指示した。

川は次第に増水し、護岸を越え住宅の床下や道路に溢れ出し交通が遮断されてしまった。

そして、ようやく明けかけた午前六時頃、高さ約三メートル余の鉄砲水が川津波となって住宅街を襲ったのである。

稲倉石川の上流で発生した大量の融雪と雪崩が、狭い山峡をダムのように堰き止め濁流を満水したが、大量の水圧に絶え切れず一挙に崩壊し、三メートル余の雪塊混じりの鉄砲水となって下流の住宅街に流れ込んだものと思われる。

鉄砲水は、川といわず道路といわず荒れ狂い、ドス黒い濁流となって住宅を直撃した。

そして、上流の鉱山のボーリング設備（当時約一千万円）と十三トンのブルドーザーを彼方の川底に押し潰し、集会場・第一共同浴場・社宅二棟・郵便局・診療所などをあっという間に崩壊。更に下流の住宅にも容赦なく襲いかかり、逃げ場を失った住民は、天井と屋根を突き破って屋根上に這い上がり、助けを求めるなど、魔の手は住民を恐怖のどん底に陥れた。

また、全壊した建物の中で逃げ場を失った住民が、流れ込んだ濁水と圧雪に埋まったとの通報があったが、三メートル余の濁流が救出の行く手を阻み、誰もが成す術もなく減水を願っていたこの時、三人の社員が身の危険も顧みず冷たい濁流を乗り越え、全壊した建物の中で首だけを出していた同僚の救出に成功したのである。

まさに生死を賭した必死の救出であった。

救出に当たったのは

・張江 芳満さん
　浜町在住 前町議会議長

・菊地 銀一さん
　余市町に移住 故人

・石井 貞夫さん
　茨城県岩間町に移住

の三名で、後に余市警察署長より、人命救助の功で特段の表彰を受けた。

（つづく）

夏の日の思い出
コンブ採り

竹内コト

海を目の前にして育った子どものころ、古平ではコンブ採りも盛んでした。

真夏の天気の良い日には磯舟が一斉に出漁して、沢江でも二十隻以上もありました。私の家でもコンブ採りをしていましたが、夏の大きな収入源でした。

沖へ出る日は朝早くから起きて、まずコンブを採る場所に磯舟を漕ぎ出します。そして、合図の白い旗が揚がるのを待ってコンブを採りはじめ、定められた時間までコンブと格闘するような重労働が続くのです。

やがて、磯舟にいっぱいになると浜に戻ってきますが、波打ちぎわに舟を横に着け、手早く舟からコンブを網のモッコに入れ、それを陸に引き揚げてところどころに積んで歩きます。そうしてからコンブを浜いっぱいに広げて干すのです。晴天の日だと石や砂は太陽の熱で熱くなっていますので、コンブもよく乾きます。午後になると二回、干してあるコンブを長いつえのような棒でひっくり返して、まだ太陽の照っているうちに浜小屋に取り込みます。なぎの続くときはそのままにしておいてコンブ採りをし、そして沖へ出られない日に家族みんなで整理をします。

その仕事は、乾燥したものを長さや幅でより分け、砂などをふき取って根元をそろえたり、花折りコンブに仕上げたりしますが大変手間がかかります。コンブの端の色の悪いところや、色の変わったところは赤羽という薬品を作っていました。このヨードは高く売れたようです。

コンブの切り取った根元は子どものおやつ代わりでした。コンブには捨てるところが無いのです。

コンブに混じってネカブが採れますが、母はこのネカブでよく「とろろ」を作ってくれたものです。

また、コンブを揚げたばかりの舟の中には、小さいカニやツブなどが残っていますが、子どもたちは大騒ぎをしながらそれらを拾い集めたことを思い出します。

今もコンブは重要な食品として利用されていますが、自然食品としても注目されているようですね。

荒海に生きた父 そして さようなら『若宮丸』

渡辺ハツエ

振り返ってみますと、亡父が漁業の関係で現在の所に住み着いたのは、私が小学校低学年のころで、ある鰊場の大網元の土地でした。荷車を引いて、家族で家財道具を運んで引っ越し、私たち子どもも心はずませ手伝ったものでした。

もと恵比須神社の道路をはさんで、両側に網元の帳場さんの家とわが家がありました。帳場さんの家は、トタン屋根の立派な家でしたが、わが家は鰊場の網元の番屋でした。子ども心にも「お隣は立派なお家だなぁ」と思っていました。

亡父は引っ越しするまで、気心の知れた仲間と二人で助宗と鱈の延縄（はえなわ）漁をしていましたが、相手の人が漁業をやめ小樽へ出て宿屋をはじめたのです。その後、亡父とは友人として長い間交情を続けておりました。

その後亡父は独立し、息子たちの協力もあって漁業を続けることができました。毎年漁期になると、発動機船をチャーター

（次ページ三段目へ続く）

古平の方言〔15〕

・むぐれる＝ふくれる、不機嫌になる
・めがす（めかす）＝おしゃれする、着飾る
「めがして どっかサ行ぐどごだ」
・めぐさい＝みっともない、目ざわり
・めぐねぇ＝（食べて）うまくない、まずい
・めごい＝めんこい、かわいい
・めっけ＝女の人をばかにすることば、
「この めっけ！」
・めっこめし＝よく炊けなかったご飯、シンのあるご飯
・めったに＝むやみに、やたらに、
「あの人 めったに来ないょ」
・めっぱ＝ものもらい（眼の病気）
・めのごかんじょう＝大ざっぱな勘定
・めぐり（めぐりぼう）＝すりこ木、
・めしたぎ＝ご飯たき、ご飯をたく人、下働きの女
家事の世話をする人という意味
・めんちゃこい＝小さい
「ずんぶ めんちゃこいさがな（魚）だ」
・めっかる、めっけだ＝見つかる、見つけた、悪いことをして「めっかったでェ」
・めふん＝マス、サケの背わた（腎臓）の塩辛、
アイヌ語で魚の腎臓という意味だともいう
・めへる＝見せる
・めらし、めらはんど＝女の子、年ごろの娘、女の子たち
・めろー＝女の子をばかにしていうことば、
「このめろー」「やろー」という言葉と引っかけて、男の子にも使うことがある

（前ページ下段より続く）

して操業していましたが、その当時はまだ発動機を操作する技術が未熟のせいもあって、機関の故障で帰港できなくなり、僚船に引かれて来ることもしばしばでした。

ある年の秋十一月のことです。助宗の漁期に入って出漁しましたが、帰港する時間になっても帰りません。そのうちに日が暮れてしまい、家の者たちも心配になって、家から出たり入ったりして焦っていました。暗闇の海には船の灯りも見えません。その時、ふと亡母のいないのに気づいて心配していましたら、しばらくして、足音も軽く母は戻ってきました。

「観音様のところへ行って来たの。そしたら…船の灯りが見えたんだよ。」

そう言うのです。私は、呆然として亡母を見つめると同時に安堵しました。

当時は街灯も無く、暗闇の山坂道です。一刻も早く船の灯りを見届けたくて、山の上の観音様のお堂まで行ったのでした。

長い歳月、苦労して漁家を支えてきた母の根性には、思い出しては今さらながら敬服しております。

父はその後、知人の紹介で発動機船を買い入れました。若宮丸（四十馬力）で当時としては大型の船でしたが、戦時中のことでもあり、特に燃料である重油の不足に苦労しました。配給制でしたが必要量には全然足りません。当然のことのようにヤミ買いもしましたが、若い者が召集され、人手不足で事態は深刻でした。

父はとうとう漁業を続けることを断念して、船を他人に譲渡してしまいました。

新しい船主さんのご多幸と、若宮丸の航海安全を祈ってじっと見送りました。家の前の浜辺に立って――。

遥かなる故郷の思い出 [44]

『古平弁』の話 ③

橘 美我 春

もう一つ「ゴッペカエシタ」話がある。

新入りの私を、先輩の三人が銭湯の帰りにミルクホールへ連れて行ってくれた。このとき、初めてアイスミルクコーヒーというものを飲んだ。先輩が、

「どうだ、うまいか……」

と聞いたので、

「ヤーヤ、生まれで初めで飲んだが、たいしためぇもんだ」

そしたら、周りのお客さんが私の顔を見てクスクス笑っているようだった。

先輩たちは次に、

「果物はどうだ？」

と言ってくれた。

大きなお皿に盛られたバナナとりんごがうまそうだ。りんごは真っ赤で、ピッカピカにみがかれていたが、このりんごはどうも四十九号らしい。

「よしっ、りんごにしよう」と思い、

「おらサ リンキけれでァ」

そう言ったら、ボーイさんがキョトンとした顔をして、

「なんですか？」

「おらサ、リンキけれって言ったんだ」

ボーイさんは首をかしげて、さっぱりわからない――という顔をしていたが、先輩はどうやらわかったらしく、

「リンキだ、リンキだ」

とボーイさんをからかったら、ボーイさんもやっとわかったようで、ニャリと笑ってりんごを持ってくると皮をむいて、

「はい、リンキをどうぞ――」

と、テーブルの上にどんとのせたら、周りのテーブルのお客さんも田舎者の私の方を見て笑っている。顔から火がでるほど恥ずかしく、りんごがうまかったのか、まずかったのかさっぱりわからなかった。

私は、りんごの名称について今でもこだわりをもっている。東京でリンキと言って大恥をかいたのが原因ではないが、私は「りんご」より「リンキ」の方が正しい名前ではないかと思っている。私が子どものころは余市でも、古平でも、美国でもリンキと言っていたし、津軽でもリンキだった。

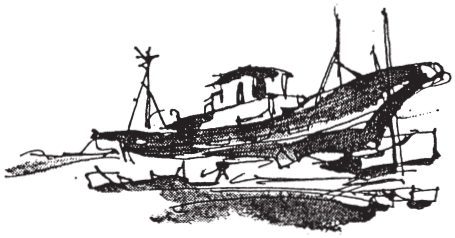
前に、高橋源吾さんが『せたかむい』の六十号に、津軽ヘントコさんの木造という人が「津軽リンキ喰ってけヘェ」と、持ってきたお土産の篭を出した。と書かれている。

今から二年ほど前にテレビで見た話だと、信州りんごの里・長野県松本市は、明治の始めに北海道同様アメリカからりんごの苗木が入って来た。その第一号のりんごの木がまだ残っていて、その木にリンキと書かれた木札がぶら下がっていた。これぞまさしく「リンキ」だ。

そのリンキがなぜりんごになったのか。お隣の国・中国では蘋菓（リンキ）と広東語でいうらしい。これはあくまでも私の考えだが、リンキからりんごになった語源はこの辺にあるのではないか。

リンキよりりんごのほうがスマートな名称かも知れないが、がぶりと丸かじりをしたときの感触は、リンキの方が合ってるんでねェベガ。どんだべ？

――――



古平のスキーの始まりと懐かしい思い出の人たち

福井幸平

人間ドックに入っていた間、古平町史第二巻をゆっくり読み直してみた。読む人も少ないのでは、と目についた記事に関係あることなどを書いてみたい。

大正八年十二月、古平尋常高等小学校に赴任した石川正高訓導はスキーが上手だったので、大正十年、石川訓導を講師に港町厳島神社の丘（通称ベンテン山）でスキー講習会を開いた。受講生は三十人ほどで、副杖（ストック）を持っているのは二、三人で、ほかは竹の先に尖った金具を取り付けただけの一本杖であった。スキーの金具は靴に合わせた板金が多かったが、ノルウェー式のバネ仕掛けのものもあった。

古平のスキーは、新地町の小樽裁判所古平出張所（登記所）の金子書記が初めてであるといわれている。

この頃、小学校の児童は木製のスキーのほか、根曲り竹を組み合わせて作った短い竹スキーに乗っていたとある。

私の記憶では、信金の先代・越中理事長が一番早くスキーに乗っていたと、ご本人からよく聞いたが、後で関口さんらしいとか、あまりはっきりしない。

新地の長谷川さん（通称カッパ屋さん）、㊫（いげた）さんのご主人、沢江の前田直さん、浜町では梅野呉服店の潮太郎さん、㊫斉藤のチョッちゃんなどが思い出される。回転技術もテレマークや、クリスチャニァなどが華やかな時代だった。

スキー一式は高価なものだったので、前田直さんなどは自分で作ったスキーをはいていた。私の時代でも、折れたスキーは鉄板で修理して平気ではいていた。スキーも手を伸ばした長さだったから、写真でも大変長く見える。スキーの型ものっぺりとしてしぼりがないが、今のスキーは、トップとテールの間をしぼってあるので回転性能がよく、一名カービングスキーともいう。長さも身長かプラス十センチぐらい、昔はエッヂのないスキーが多く、あっても平エッヂで頼りのないものであった。

川柳

石井愛子

老いて来てアレとコレとで名前出ず
皺とシミ良てとこないけど笑い皺
老夫婦婆のむほんも円く済み

渡辺ハツエ

こどもニュース見て解してる婆の知恵
電話料けちって気になる子の安否
鰊場を語る先人またも逝き

北政道

少子化の国を憂いて鯉のぼり
聖書手に神の啓示を説き歩く
歳時記に偽りなくて春萌ゆる

俳句

古平ホトトギス会

鰊の句百余遺せし師を偲ぶ　斉藤波留

春休み若葉マークの娘の自動車　仲谷比呂子

詩を読む師の不精髭山笑う　山口悦子

かんじきを背に裏山の枝打ちに　岩瀬みのる

岩肌をなぞりつ荒る冬の浪　越野清治

春草出でたる試歩となりにけり　福井幸平

いとまする客見送りし寒の月　大島喜恵

馬飼はぬ百姓に嫁し耕耘機　水見句丈

顔見世の誘ひのあれど漁最中　大和田絵伊

烏賊火燃ゆ積丹岬を一線に　仲谷美砂

初電話ロスの家族と卒寿我　山口浪

闘病の一息抜けるお正月　越野スミ子

約束の達磨絵をかく三ケ日　越野敏雄

マーガレット含羞むように首傾ぐ　西島サツ子

寒行のいつか読経の声も凍て　外山俊久

堤防ののぼり下りもふきのとう　長谷川和子

ほんとうにゆきは白くてつめたいよ　小四　水見翔大

おめでとういってもらったおとしだま　幼　水見玲央

夏枯やテトラポッドに海猫並ぶ　仲谷安代